

作況ニュース（第7号）

水 稲
大 豆

（発行：令和2年8月26日） （編集：令和2年8月24日）

発行：秋田県農林水産部

水 稲

早期の落水を避け、高品質米の生産を！

- 今後は高温が予想されるため、的確な刈り取り判断を—
- 出穂期24日後頃のカメムシ防除で、斑点米を防止—

1 今後の気象の見通し

(1) 東北地方1か月予報（8月22日～9月21日）【令和2年8月20日 仙台管区气象台発表】

＜予想される向こう1か月の天候＞

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

東北日本海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率70%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

次回の予報発表予定：1か月予報 毎週木曜日14時30分

3か月予報 9月25日(金) 14時

【季節予報】 http://www.jma.go.jp/jp/longfcst/102_00.htm

【高温注意情報】 <http://www.data.jma.go.jp/fcd/yoho/data/kouon/>

2 県内の概況

(1) 気象経過

【秋田地方气象台】

7月中旬： 低気圧や前線の影響で曇りや雨の日が多かったが、旬の後半には高気圧に覆われて晴れた日もあった。

旬平均気温は、低いから平年並。旬降水量は、平年並からかなり多い。旬間日照時間は平年並から多い、内陸の南部で少ない所もあった。

7月下旬： 前線や低気圧の影響で曇りや雨となった日が多く、27日から28日にかけては前線の活動が活発となったため大雨となった所があった。また、一時的に高気圧に覆われて晴れた日もあった。

旬平均気温は、平年並から低い。旬降水量は、平年並からかなり多い。旬間日照時間は、かなり少ないから少ない。

8月上旬： 気圧の谷や低気圧、前線の影響により曇りや雨の日が多く、8日から9日にかけては、前線上の低気圧が東北北部を通過したことにより、大雨となった所もあった。

旬平均気温は、概ね平年並。旬降水量は、概ね多い、一部でかなり多いところもあった。旬間日照時間は少ないから平年並、鷹巣ではかなり少なかった。

8月中旬： 旬の前半は低気圧や前線等の影響で曇りや雨の日が多かったが、18日以降は高気圧に覆われて晴れた日が多かった。

旬平均気温は、高いから平年並。旬降水量は、概ね平年並から多い。旬間日照時間は平年並から少ない。

[旬統計値（秋田）]

	気温 (℃)	平年差 (℃)	階級区分	降水量 (mm)	平年比 (%)	階級区分	日照時間 (hr)	平年比 (%)	階級区分
7月中旬	22.5	0.0	平年並	110.5	162	多い	47.0	113	多い
7月下旬	24.0	-0.6	平年並	160.5	357	かなり多い	35.0	56	少ない
8月上旬	25.8	+0.5	平年並	86.0	174	多い	33.8	53	少ない
8月中旬	25.9	+0.6	平年並	38.5	73	平年並	56.9	87	少ない

(2) 本田の生育

1) 移植栽培

① 出穂状況調査

各地域振興局調査による出穂期は、県北では平年並の8月3日、中央では平年並の8月2日、県南では平年並の8月3日であった。

表－1 出穂期の状況（各地域振興局調査、全品種の平均）

全県			県北			中央			県南		
本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差
8/3	+2日	±0日	8/3	+1日	±0日	8/2	+1日	±0日	8/3	+1日	±0日

注) 地域としての出穂期であり、全品種平均の出穂期である。

② 定点調査結果

定点調査結果（8月20日現在）では、あきたこまち（県内62地点）は、出穂期8月2日（平年差－1日）、穂数461本/m²（平年比104%）、1穂着粒数74.2粒/本（同101%）、m²当たり着粒数は34.0千粒（同106%）であった。

ひとめぼれ（6地点）は、出穂期8月4日（平年差±0日）、穂数496本/m²（平年比101%）、1穂着粒数72.7粒/本（同106%）、m²当たり着粒数は36.0千粒（同109%）であった。

あきたこまちは、平年に比べ、出穂期は県北と中央が1日早く、県南が2日早く、全県では1日早かった。穂数は県北と県南で多く、中央で少なかった。1穂着粒数は、県北と中央でやや多く、県南は並だった。m²当たり着粒数は、県北と県南で多く、中央でやや少なかった。

表－２ 定点調査結果（各地域振興局 8月20日調査）

品種	地区	出穂期			㎡当たり穂数			1穂当たり着粒数			㎡当たり着粒数		
		本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)
あきたこまち	県北	8/1	0	-1	482	97	105	73.4	104	103	35.2	101	109
	中央	7/31	0	-1	408	90	94	77.3	103	103	31.5	93	97
	県南	8/2	0	-2	463	94	106	73.7	104	99	34.0	98	106
	全県	8/2	1	-1	461	95	104	74.2	103	101	34.0	98	106
ひとめぼれ	中央	8/4	1	0	496	97	101	72.7	109	106	36.0	106	109

※平年値：平成22年～令和元年までの過去10年平均

2) 直播栽培

① 直播定点調査ほの生育状況

全県的な生育概況は、幼穂形成期 7月20日（平年差+1日）、減数分裂期 7月31日（同±0日）、出穂期 8月9日（同±0日）、穂揃期 8月14日（同+1日）であった。本年は出穂期が平年並、出穂期から穂揃期までの日数は5日であった。

7月22日の調査では、草丈66.1cm（平年比96%）、茎数610本/㎡（同105%）、葉数11.0葉（平年差-0.1葉）、葉緑素計値42.6（平年比115%）であった。

8月20日の調査では、穂数529本/㎡（平年比116%）、葉数12.6葉（平年差±0葉）であり、平年に比べ穂数は多く、葉数は平年並であった。1穂当たり着粒数は72.4粒（平年比114%）、㎡当たり着粒数は37.3千粒（同131%）で平年に比べ1穂当たり着粒数が多く、㎡当たり粒数も多かった。

表－３ 生育ステージ（湛水土中直播：品種 あきたこまち、各地域振興局調査）

設置場所	幼穂形成期			減数分裂期			出穂期			穂揃期		
	本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)
農 試	7/20	2	1	8/1	1	-1	8/10	2	0	8/13	0	-1
大館市	7/21	1	1	7/30	1	-2	8/10	0	-2	8/15	3	0
井川町	7/22	4	2	8/1	5	1	8/11	6	2	8/17	6	4
美郷町	7/17	-2	-1	7/29	0	0	8/7	-1	-1	8/13	1	0
横手市	7/22	-1	1	8/3	1	3	8/11	-1	0	8/15	0	1
全 県	7/20	1	1	7/31	2	0	8/9	1	0	8/14	2	1

表－４ 定点調査結果（湛水土中直播：品種 あきたこまち、各地域振興局 7月22日調査）

設置場所	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
	本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
大館市	65.5	109	100	894	132	149	10.8	0.0	0.0	41.3	124	112
井川町	66.5	95	95	525	83	92	11.8	0.1	0.6	44.5	143	123
美郷町	68.8	101	101	472	100	86	11.0	-1.0	-0.4	43.5	131	117
横手市	63.5	102	89	549	106	92	10.5	-0.4	-0.6	41.0	122	106
全 県	66.1	102	96	610	105	105	11.0	-0.3	-0.1	42.6	130	115

表－５ 定点調査結果（湛水土中直播：品種 あきたこまち、各地域振興局 8月20日調査）

設置場所	㎡当たり穂数			葉数			1穂着粒数			㎡当たり着粒数		
	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年比 (葉)	平年比 (葉)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)
大館市	739	171	167	12.3	-0.6	-0.1	57.7	88	97	42.7	150	163
井川町	479	91	102	13.2	0.6	0.7	86.8	164	138	41.5	150	141
美郷町	432	100	99	12.4	-0.5	-0.4	79.4	121	120	34.4	121	120
横手市	466	96	97	12.4	-0.1	-0.1	65.7	129	101	30.6	125	98
全 県	529	115	116	12.6	-0.2	0.0	72.4	126	114	37.3	137	131

② 農試直播作況ほ場の生育状況

幼穂形成期 7月20日（平年差＋1日）、減数分裂期 8月1日（同－1日）、出穂期 8月10日（同±0日）、穂揃期 8月14日（同±0日）であった。穂揃期の生育は茎数440本/㎡（平年比91%）、葉数12.3葉（平年差－0.5葉）、葉緑素計値33.1（平年比102%）、1穂当たり着粒数82.0粒（平年比125%）、㎡当たり籾数36.1千粒（同117%）であった。

平年に比べ㎡当たり茎数は少ないが、1穂当たり着粒数が多かったことから、㎡当たり籾数は多くなった。また、平年より葉数は少なく、葉緑素計値は並であった。

表－６ 農試直播作況ほ場の生育状況（あきたこまち、湛水土中条播、5月11日播種、穂揃期頃調査）

出穂期			穂揃期			㎡当たり茎数			葉 数		
本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)
8/10	+2	±0	8/14	+1	±0	440	78	91	12.3	-0.1	-0.5
葉緑素計値			1穂当たり着粒数			㎡当たり籾数					
本年	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)			
33.1	108	102	82.0	158	125	36.1	123	117			

注1) 平年値：過去10年間（H22～R1）の平均値

注2) 葉緑素計値は止葉を測定した。

注3) 1穂当たり着粒数及び㎡当たり籾数は、サンプル調査による。

注4) 窒素施用量：基肥0.8kg/a（LP70：速効性＝1：1）

注5) 茎数は出穂した茎と未出穂の茎の合計

(3) 病害虫の発生概況

1) 斑点米カメムシ類

8月4半旬の抽出ほ場調査における斑点米カメムシ類の水田内すくい取り数は平均0.9頭（平年1.2頭）でやや少なく、発生地点率は36%（平年25%）で高かった。種別に見るとアカスジカスミカメが大部分を占めた。特に、水田内にノビエやカヤツリグサ科雑草が発生しているほ場で斑点米カメムシ類の発生が多かった。

2) いもち病

8月4半旬の抽出ほ場調査における葉いもち上位2葉の発病株率は4.2%（平年1.2%）、穂いもちの発病株率は4.4%（平年2.1%）でともに高かった。

また、上位2葉の発病地点率は44.4%（平年30.1%）で高く、穂いもちの発病地点率は28.9%（平年36.5%）で平年並だった。

3 当面の技術対策（8月下旬～10月上旬）

本年の定点あきたこまちでは、出穂期は平年より1日早く、前年より1日遅かった。また、 m^2 当たり着粒数は地域差はあるものの34.0千粒と多い。出穂後の気温は全県的に並～高く、日照時間は並～少なかった。仙台管区気象台が発表した1か月予報によると、気温が高く、日照時間は並～多いと見込まれる。また、農試気象感応試験の調査では登熟は平年並からやや遅い。これらのことから、登熟の向上を図るための適正な水管理を徹底するとともに、刈り取り適期を逸しないよう努める。

（1）登熟の向上を図る水管理

出穂後30日間は間断かん水を実施し、土壌水分を保持しながら稲体の活力を維持し、登熟の向上に努める。特に、開花後25日までは米粒が肥大するので、土壌水分が不足しないように水管理を徹底する。落水時期が早いと、葉色の低下、葉の枯れ上がり、根の機能減退等により登熟が妨げられ、収量、品質、食味の低下を招くので、早期の落水は避ける。

（2）適期の刈り取り

出穂期後の日平均気温の積算値による刈り取り目安は、早生種は950～1,050℃、中晩生種は1,050～1,150℃である。定点調査ほの出穂期とアメダスデータの積算気温により予測した地域別の刈り取り適期の目安（品種：あきたこまち）を資料編p.25の表-12に示すとおり、刈り取り適期は前年並に早まる可能性がある（資料編p.25参照）。

今後の天候に注意し、最終的な刈り取り時期の決定は、各ほ場の籾の黄化程度を必ず確認し、黄化程度が90%に達した時期で判断する。

（3）斑点米カメムシ類防除

気象庁発表の2週間気温予報（8月24日更新）によると、8月25日から9月5日までの気温は高い～かなり高いと予報されていることから、斑点米カメムシ類の加害行動が活発になると予想されるので注意する。

1）薬剤散布

1回目の防除が適期に行われなかったほ場、水田内雑草があるほ場、牧草地や休耕田等に隣接しているほ場、現在水田内に斑点米カメムシ類の発生が認められるほ場等では、出穂期24日後頃に畦畔を含めたほ場全体にエクシード剤（使用時期は収穫7日前まで）又はキラップ剤（使用時期は収穫14日前まで）の茎葉散布剤を散布する。

農薬を散布する際には養蜂業者等との連携をとり、みつばち等への危害防止を徹底する。

2）雑草管理

法面や休耕田等の雑草地の草刈りは、稲の収穫2週間前以降に行う（令和2年8月21日発表 農作物病害虫発生予察情報 防除対策情報 第6号を参照）。

(4) 穂いもち防除

葉いもち多発ほ場及び上位葉（止葉及び次葉）に発病が認められるほ場では、穂いもちの発生・拡大を防ぐために、穂揃期の防除に加え、傾穂期に追加防除を実施する。傾穂期以降の穂いもち防除には、ラブサイド剤を使用する。最終防除時期は出穂後25日頃までとし、防除に当たってはフサライド*の総使用回数、収穫前日数に注意する。

※ラブサイド剤の有効成分であるフサライドの総使用回数は3回以内で、使用時期は収穫7日前までである。

(5) 台風等による被害対策

これから9月にかけては台風が接近する時期である。台風は強い風雨を伴うため、倒伏や風水害、進路によってはフェーン現象や潮風害の原因となる。

特に、倒伏が発生すると受光体勢が著しく悪化し、登熟の低下による減収と穂発芽による品質低下を招くことから、倒伏した場合は次の事項を実施する。

- ①ほ場の停滞水は速やかに排水する。
- ②早期に倒伏した場合は、速やかに4株ずつ束ねて立て直し、穂が乾燥するようにする。
- ③登熟後期の場合は早めに刈り取るとともに、追い刈りや横刈り等により刈り取り精度の向上に努める。
- ④穂発芽した場合は、刈り分けを行い品質低下を防止する。
- ⑤フェーン現象が発生する危険性がある場合には、終息するまで湛水状態とする。

(6) 作業計画

作付品種の熟期と栽培面積を考慮し、刈り遅れにならないよう乾燥・調製能力に合わせた作業計画を立てる。

また、コントリーエレベーターやライスセンターを利用する場合は、早めに作業計画を組む。

(7) コンバイン収穫

コンバイン収穫は、損失粒やワラ・穀粒の詰まりが発生しないように、稲の生育量に合わせた作業速度で行う。

また、収穫時の籾水分は25%以下が望ましく、収穫作業は稲体が乾燥している午前10時～午後5時頃に実施する。

コンバインによる収穫作業の能率向上のため、次の点は特に留意する。

- ①作業開始前には入念に整備・点検をする。
- ②機械操作の習熟を図る。
- ③こぎ胴回転数を規定内に抑え、脱ぶ損傷粒が発生しないようにする。

(8) 高品位米に仕上げるための乾燥・調製

乾燥・調製は、米を商品として仕上げる大事な作業である。作業の良否が米の品質と食味に影響するため次の点に留意する。

①乾燥作業の留意点

- ア 乾燥機の特徴、操作手順をよく理解する。
- イ 高水分粳の刈り取りを避け、わら屑等の混入を少なくして粳の循環をよくする。
- ウ 乾燥前、中、後のそれぞれの工程で正確な水分測定を行う。
- エ 水分が多い粳や活青米の多い粳などは、粳含水率が18～20%まで低下した時点で乾燥機を休止し、粳全体のテンパリングを行ってから仕上げ乾燥する二段乾燥を実施する。
- オ タイマー設定時間はやや短めとし過乾燥を防止する。自動水分計のものでもやや高めの水分で一時停止し、温度設定する時は粳の状態を考え、過乾燥にならないようにする。
- カ 乾燥の仕上がりは、玄米水分15%とする。なお、過乾燥になると胴割粒が発生するとともに食味が低下するので注意する。

②調製作業（粳摺り・選別）

〔粳摺り〕

- ア 粳摺り作業は、穀温が高いと肌ズレ米が発生しやすいので、穀温が常温まで低下してから行う。
- イ 粳摺り機の処理量は米選機の能力に合わせ、米選機の能力以上に玄米を供給しない。
- ウ ゴムロールの摩耗程度を点検し、試し摺りを行い脱ぶ率が80～85%になるよう調節する。全自動の場合もゴムロールの摩耗点検は必ず行う。

〔米選〕

- ア 網目は1.9mmを基本とし、整粒歩合80%以上を確保する。
- イ 規定範囲内の流量で選別する。

(9) 農作業事故の防止【秋の農作業安全運動（9月10日～10月20日）】

秋の農繁期（9～10月）は、コンバイン等の大型農業機械を扱う機会が多くなることから、機械の操作等には十分注意する。過去10年間における本県の農作業死亡事故のうち約2割がこの時期に発生している。

農作業事故の未然防止のため、無理のない作業計画を立てるとともに作業時は体調を整え、作業に適した服装で行う。また、作業機械の事前点検・整備を徹底し、運転技能を過信せず操作には細心の注意を払う。

(10) 稲わら等の有効活用の推進

秋田県公害防止条例で、10月1日から11月10日までの期間は稲わら等の焼却が全面的に禁止されている。稲わらや粳殻は、本田へのすき込みや堆肥などにして有効活用を図る。

(11) 農薬の飛散防止と安全使用の徹底

- ① 農薬散布時は、周辺作物への飛散防止対策を徹底する。
- ② 散布前に使用農薬のラベル等を熟読し、使用法を遵守する。
- ③ 健康管理や服装・装備等を万全にし、涼しい時間帯に散布する。
- ④ 農薬散布後は、防除器具の洗浄を確実にを行う。
- ⑤ 防除履歴を必ず記録する。

【時期別・主要作業別指導事項】

月・旬	作業の種類	主な指導事項
8月下旬 ～ 10月上旬	登熟向上の水管理	<ul style="list-style-type: none"> ○ 間断かん水を励行し、稲体の活力維持を図る。 ○ 落水時期は出穂後30日以降とする。
	刈り取り時期の判断	<ul style="list-style-type: none"> ○ 品種別、ほ場別に刈り取り時期を正しく診断し、適期を逸せず刈り取りを行う。 ○ 粃の黄化程度を確認し、黄化程度90%を刈り取り適期とする。
	斑点米カメムシ類防除	<ul style="list-style-type: none"> ○ 1回目の防除が適期に行われなかったほ場、水田内雑草があるほ場、牧草地や休耕田等に隣接しているほ場、現在水田内に斑点米カメムシ類の発生が認められるほ場等では、出穂期24日後頃に畦畔を含めたほ場全体にエクシード剤又はキラップ剤の茎葉散布剤を散布する。 ○ 草刈りは収穫2週間前以降に行う。
	穂いもち防除	<ul style="list-style-type: none"> ○ 葉いもち多発ほ場及び上位葉（止葉及び次葉）に発病が認められるほ場では、ラブサイド剤を散布する。 ○ 最終防除時期は出穂後25日頃までとする。
	台風等の被害対策	<ul style="list-style-type: none"> ○ 停滞水の排水に努める。 ○ 穂発芽による品質低下が懸念される場合は、速やかに収穫作業に入る。 ○ 追い刈りや横刈り等により刈り取り精度の向上に努める。 ○ 穂発芽した場合は、刈り分けを行い品質低下を防止する。
	収穫・乾燥・調製	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高水分粃の刈り取りは避ける。 ○ 水分の測定は、できる限りサンプル数を多くして行う。 ○ 二段乾燥で過乾燥の防止に努める。 ○ 網目は1.9mmを基本とし、整粒歩合80%以上に仕上げる。
	農作業事故の防止	<ul style="list-style-type: none"> ○ 無理のない作業計画を立て、万全な体調で作業に適した服装で行う。 ○ 作業機械の事前点検・整備を徹底し、運転操作時は細心の注意をはらう。
	稲わらの有効活用	<ul style="list-style-type: none"> ○ 稲わらや粃殻は焼却せずに堆肥にするなど有効活用を図る。
	農薬飛散防止と安全使用	<ul style="list-style-type: none"> ○ 農薬散布時は、周辺作物への飛散防止対策を徹底する。 ○ 散布前に使用農薬のラベル等を熟読し、使用法を遵守する。 ○ 健康管理や服装・装備を万全にし、涼しい時間帯に散布する。 ○ 農薬散布後は、防除器具の洗浄を確実にを行う。 ○ 防除履歴を必ず記録する。

大豆

子実病虫害の適期防除を

- － 降雨に備えてほ場の排水対策を徹底 －
- － 適期収穫による高品質大豆の生産 －

1 大豆の生育概況

(1) 全県の概況

開花期は、地域により差があるが、全県の開花盛期は7月31日で、平年並となった。

6月6半旬以降、降雨日が多く、集中的な降雨もあり、中耕・培土作業は遅れたほ場が多い。排水の悪いほ場や播種が遅かったほ場では、湿害による下位葉の黄化や落葉等が見られている。

(2) 農業試験場（大豆作況調査試験）

農業試験場におけるリュウホウの開花期は、6月1日播種（標播）が7月25日（平年差－4日）、6月19日播種（晩播）が8月6日（同＋1日）であった（表－1）。

6月1日播種（標播）のリュウホウにおける8月20日現在の生育は、草丈は122cm（平年比118%）と長く、主茎節数は16.4節（平年差＋1.0節）、分枝数は3.9本（同＋0.8本）といずれも多かった（表－2）。

6月19日播種（晩播）のリュウホウにおける8月20日現在の生育は、草丈は108cm（平年比112%）と長く、主茎節数は14.2節（平年差＋0.1節）、分枝数は4.2本（同＋1.4本）といずれも多かった（表－2）。

表－1 農業試験場におけるリュウホウの播種期別開花期

播種時期	播種日(月日)	開花期(月日)			
		本年	前年	平年	平年差(日)
標播	6月1日	7月25日	7月30日	7月29日	－4
晩播	6月19日	8月6日	8月6日	8月5日	＋1

注) 農試作況調査ほ場における標播の平年値は平成26年～令和元年の平均値、晩播の平年値は平成22年～令和元年の平均値。

表－2 農業試験場におけるリュウホウの生育状況

播種時期	播種日(月/日)	調査日(月/日)	草丈(cm)			主茎節数(節)			分枝数(本)		
			本年	前年比(%)	平年比(%)	本年	前年差(節)	平年差(節)	本年	前年差(本)	平年差(本)
標播	6/1	7/31	100	141	136	15.2	+3.0	+2.8	3.3	+1.7	+1.8
		8/11	119	132	126	16.4	+1.3	+1.2	3.9	+1.0	+0.9
		8/20	122	120	118	16.4	+1.0	+1.0	3.9	+0.6	+0.8
晩播	6/19	7/31	64	117	117	9.8	+0.1	+0.5	0.9	±0.0	+0.7
		8/11	88	122	112	13.2	±0.0	+0.3	3.1	+1.3	+1.4
		8/20	108	106	112	14.2	－1.4	+0.1	4.2	+0.4	+1.4

注) 農試作況調査ほ場における標播の平年値は平成26年～令和元年の平均値、晩播の平年値は平成22年～令和元年の平均値。

2 技術対策

(1) 紫斑病防除の徹底

- 1) 防除は開花期20～30日後に行う。また、着莢期に降雨が多い場合は1回目防除の約10日後に追加防除を行う。ほ場の開花時期にあわせて適期に防除する。
- 2) 刈り取りが遅れたり、刈り取り後脱穀せずに多湿状態で放置しておくると紫斑粒が増加するため、適期刈り取り及び速やかな乾燥に努める。
(令和2年度版秋田県農作物病害虫・雑草防除基準(以下、「防除基準」) p. 51を参照)

(2) マメシクイガ防除の徹底

- 1) 子実の食害はマメシクイガによる被害が最も多く、被害粒率が30%を超えることもある。
- 2) 大豆連作2～3年目以降に被害が増大する傾向にある。
- 3) 連作により密度が高まるので、連作ほ場では8月下旬～9月上旬にパーマチオン水和剤、アグロスリン乳剤、アディオン乳剤のいずれかで防除する。
- 4) 上記以外の薬剤で防除を行う場合は、9月上旬に1～2回防除する。なお、2回防除する場合の散布間隔は7～10日間とする。
(防除基準p. 55を参照)

(3) 排水対策の徹底

台風や秋雨による停滞水は刈り取り作業に影響することから、明渠や排水路の点検・補修などの排水対策を適切に行う。

(4) 乾燥調製施設の使用計画の調整

水稲と共同の乾燥調製施設を使用する場合は、使用計画を調整し、刈り遅れを防ぐ。

(5) 収穫、乾燥、選別・調製の留意点

1) 収穫

収穫は、大豆の枯れ上がり程度、茎や子実の水分状態を見極めて計画的に行うことが重要である。また、コンバイン等の調整・試運転等は事前に済ませる。

- ① 大豆子実の外観品質は成熟期以降、徐々に低下するため、成熟期の早いほ場から収穫する。
- ② 汚損粒の発生を抑えるため、茎水分50%以下(茎がポキッと折れる頃を目安)で刈り取りを行い、作業は朝露により子実が湿った時間帯を避ける。
- ③ コンバインへの土の掻き込みは汚損粒発生の主原因であるため、土を掻き込まない刈高にあらかじめ調整する。また、排水性の悪いほ場や滞水し易い箇所は、コンバインの沈下に伴う土の掻き込みが予想されるため、事前にほ場の滞水程度を観察する。ほ場内の大型雑草や落葉の遅い株はあらかじめ抜き取る。
- ④ 脱穀後は風通しのよい場所に置く。乾燥施設等の都合で刈り取り後、直ちに乾燥作業を行うことができない場合は、保管場所や保管方法に配慮する。

2) 乾燥

乾燥前の子実水分と乾燥条件により、しわ粒や裂皮粒等の被害粒が発生する場合がありますので注意する。また、乾燥温度の目安は、次のとおりである。

- ① 子実水分18%の場合 室温 +15℃以下
- ② 子実水分22%の場合 室温 + 8℃以下
- ③ 子実水分26%の場合 無加温 (常温通風)

※送風温度は30℃以下、乾燥速度は0.4%/h以下とし、子実水分を15%に仕上げる。

3) 選別・調製

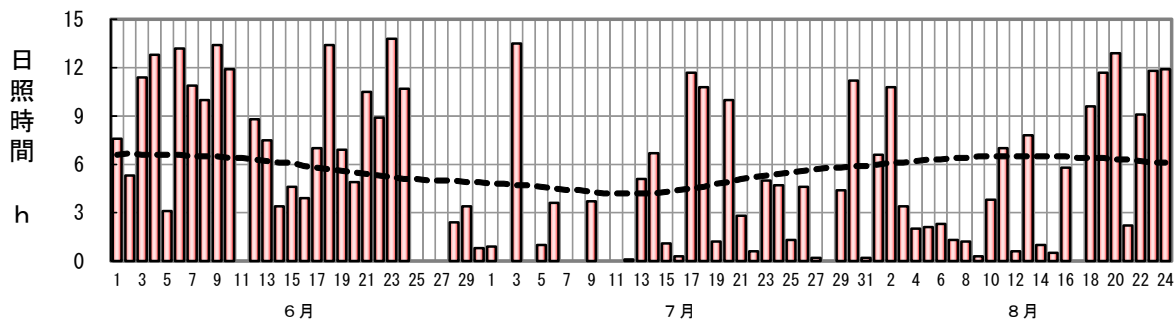
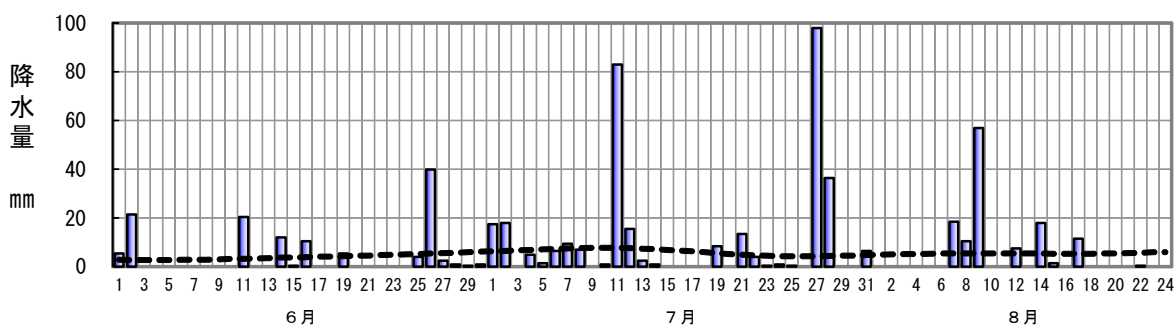
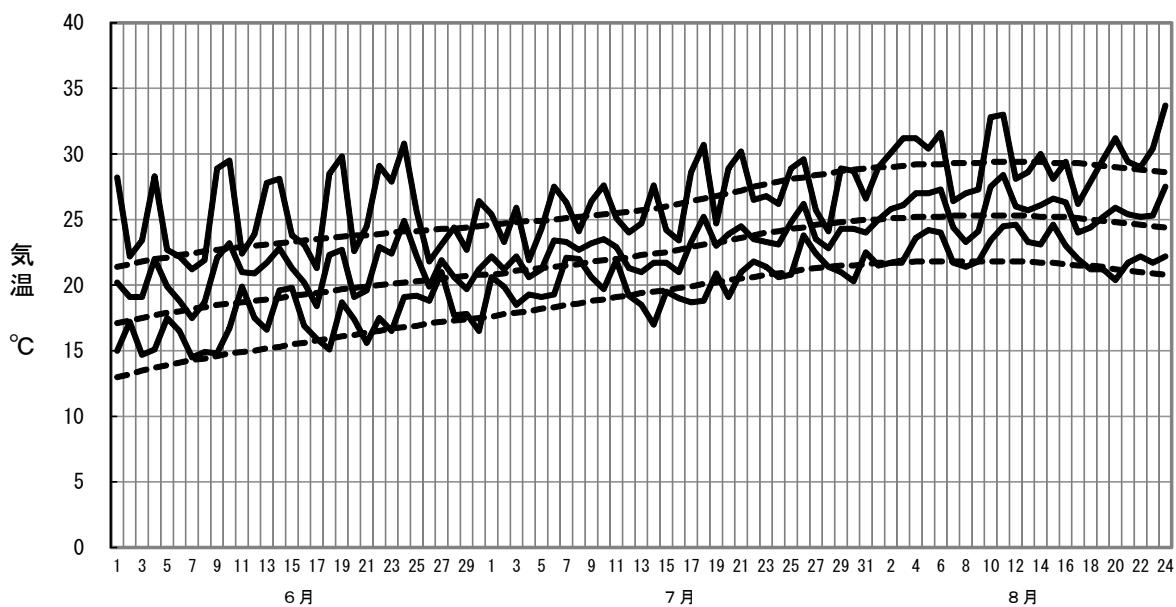
仕上げ乾燥後、選別機で夾雑物や被害粒等を除去し、整粒歩合の高い高品質な大豆に仕上げる。粒径選別に用いる篩い目は、大粒は7.9mm、中粒は7.3mm、極小粒は4.9mmを使用する。

資 料 編

1 気象経過

(1) 令和2年6月1日から8月24日の気象経過図(観測地点：秋田地方気象台)

(資料 秋田地方気象台)



(2) 旬別気象状況 (秋田市)

(資料 秋田地方気象台)

時期 項目	7月上旬		7月中旬		7月下旬		7月計	
	本年	平年比較	本年	平年比較	本年	平年比較	本年	平年比較
平均気温(℃)	22.4	+1.0	22.5	0.0	24.0	+0.1	23.0	+0.1
降水量(mm)	66.0	88%	110.5	162%	160.5	357%	337.0	179%
日照時間(hr)	22.7	49%	47.0	113%	35.0	56%	104.7	70%

時期 項目	8月上旬		8月中旬		8月下旬		8月計	
	本年	平年比較	本年	平年比較	本年	平年比較	本年	平年比較
平均気温(℃)	25.8	+0.5	25.9	+0.6	—	—	—	—
降水量(mm)	86.0	174%	38.5	73%	—	—	—	—
日照時間(hr)	33.8	53%	56.9	87%	—	—	—	—

2 定点調査結果 (各地域振興局 8月20日調査)

表-1 定点調査結果 (品種: あきたこまち)

地域振興局	調査点数	出穂期			㎡当たり穂数			1穂当たり着粒数			㎡当たり着粒数		
		本年 (月日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)
鹿角	5	8/4	0	1	548	105	115	65.3	101	96	35.9	107	112
北秋田	9	7/31	1	-1	476	99	102	73.7	102	107	35.1	101	110
山本	9	8/2	1	0	452	91	102	77.7	106	103	35.0	98	107
秋田	8	7/31	1	-1	399	89	92	77.5	102	103	30.9	91	95
由利	2	8/2	-1	-1	445	95	105	76.7	110	103	33.8	106	109
仙北	10	8/1	0	-2	437	81	98	72.5	106	100	31.6	87	99
平鹿	11	8/3	0	-1	465	102	107	77.2	105	101	35.6	106	108
雄勝	8	8/3	0	-1	494	102	115	70.4	100	96	34.7	102	111
全県平均	62	8/2	1	-1	461	95	104	74.2	103	101	34.0	98	106
収量構成要素の目標値 (目標数量: 570kg/10a)					県北	中央	県南	県北	中央	県南	県北	中央	県南
					450	440	415	70	69	73	31.5	30.4	30.3

表-2 定点調査結果 (品種: ひとめぼれ)

地域振興局	調査点数	出穂期			㎡当たり穂数			1穂当たり着粒数			㎡当たり着粒数		
		本年 (月日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)
秋田	2	8/5	-1	-2	502	92	101	76.9	115	108	38.4	105	110
由利	4	8/4	2	0	493	100	102	70.6	106	105	34.8	106	108
中央地区平均	6	8/4	1	0	496	97	101	72.7	109	106	36.0	106	109

表-3 定点調査結果 (品種地区別)

品種	地区	出穂期			㎡当たり穂数			1穂当たり着粒数			㎡当たり着粒数		
		本年 (月日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)
あきたこまち	県北	8/1	0	-1	482	97	105	73.4	104	103	35.2	101	109
	中央	7/31	0	-1	408	90	94	77.3	103	103	31.5	93	97
	県南	8/2	0	-2	463	94	106	73.7	104	99	34.0	98	106
	全県	8/2	1	-1	461	95	104	74.2	103	101	34.0	98	106
ひとめぼれ	中央	8/4	1	0	496	97	101	72.7	109	106	36.0	106	109

3 関連成績

(1) 気象感応試験

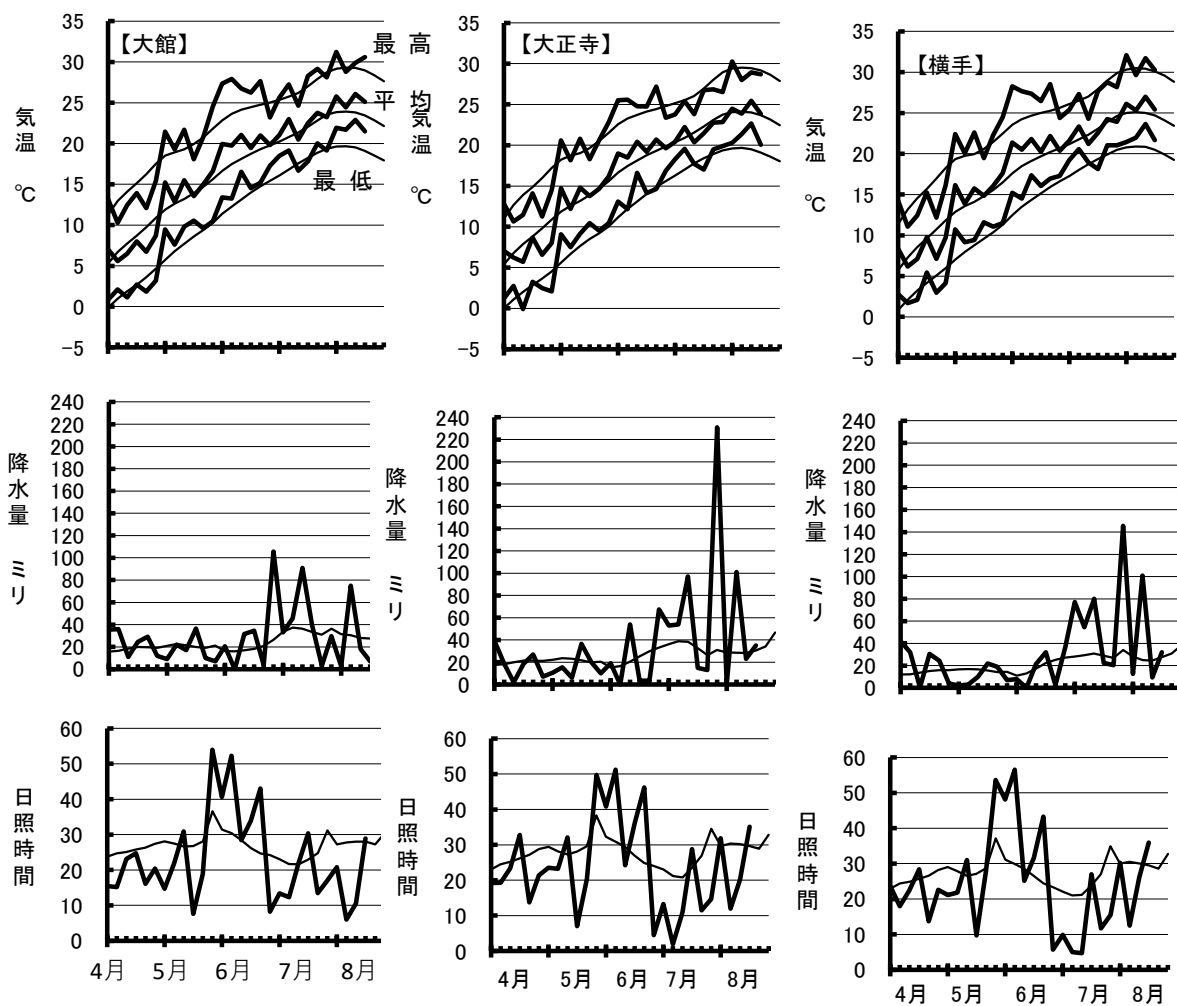
1) 稲作期間の気象（7月下旬～8月4半旬）

期間を通じて、最低気温が高く、日照時間が少なかった。

大館：平年に比べ、7月5半旬以降、期間をとおして平均気温は高く、最低気温はかなり高く、最高気温は平年並～高かった。降水量は7月6半旬～8月3半旬は多かった。日照時間は7月5半旬～8月3半旬はかなり少なく、8月3旬は並だった。

大正寺：平年に比べ、7月5半旬以降、期間をとおしては最高気温は並～低く、最低気温はかなり高く、平均気温は並～高かった。降水量は8月1半旬を除いて多く、7月6半旬はかなり多かった。日照時間は8月1半旬、4半旬は並だが、他はかなり少なかった。

横手：平年に比べ、7月5半旬以降、期間をとおしては最高気温、平均気温とも高く、最低気温がかなり高かった。降水量は7月6半旬、8月2半旬は多く、その他の期間は並～少なかった。日照時間は7月6半旬、8月3半旬は並、8月4半旬はやや多く、他はかなり少なかった。



図－1 令和2年の稲作期間中の気象経過（8月20日まで、アメダス半旬別データ）

2) 生育概況

<減数分裂期の生育状況>

農試(標植)は、草丈72.5cm(平年比100%)、茎数529本/m²(同109%)、葉数12.7葉(平年差+0.3葉)、葉緑素計値40.9(平年比115%)であった。時期別理想生育量との比較では、草丈および茎数、葉緑素計値、葉数は上限値より高かった。

農試(晩植)は、草丈71.5cm(前年比96%)、茎数455本/m²(同101%)、葉数12.7葉(前年差±0葉)、葉緑素計値35.2(前年比100%)であった。時期別理想生育量との比較では、草丈は適値で、茎数は下限値よりやや少なく、葉数は上限値より高く、葉緑素計値は下限値より低かった。

表-4 気象感応試験(減数分裂期)の生育状況(あきたこまち)

試験地	減数分裂期	草丈			m ² 当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
農試(標植)	7月21日	72.5	105	100	529	91	109	12.7	-0.3	0.3	40.9	121	115
農試(晩植)	7月28日	71.5	107	96	455	91	101	12.7	0.1	0.0	35.2	102	100

注1. 移植日:農試(標植)5月15日、農試(晩植)5月25日

注2. 平年値は、標植は平成12~令和元年、晩植は平成29~令和元年の平均値を用いた。

注3. 窒素施用量:農試基肥0.7kg/a、減数分裂期追肥0.2kg/a

<穂揃期の生育状況>

農試(標植)は、草丈90.3cm(平年比98%)、茎数443本/m²(同100%)、葉数12.9葉(平年差+0.1葉)、葉緑素計値43.3(平年比111%)であった。平年に比べ草丈および茎数は並、葉緑素計値は高かった。

農試(晩植)は、草丈87.2cm(前年比91%)、茎数422本/m²(同103%)、葉数13.0葉(前年比-0.1葉)、葉緑素計値34.7(前年比192%)であった。前年に比べ草丈は短く、茎数は並で、葉緑素計値は低かった。

表-5 気象感応試験(穂揃期)の生育状況

試験地	出穂期	草丈			m ² 当たり茎数			葉数			葉緑素計値			穂揃期
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)	
農試(標植)	7月29日	90.3	104	98	443	84	100	12.9	-0.2	0.1	43.3	109	111	8月1日
農試(晩植)	8月4日	87.2	97	91	422	102	103	13.0	-0.5	-0.1	34.7	89	92	8月7日

注1. 移植日:農試(標植)5月15日、農試(晩植)5月25日

注2. 平年値は、標植は平成12~令和元年、晩植は平成29~令和元年の平均値を用いた。

注3. 窒素施用量:農試基肥0.7kg/a、減数分裂期追肥0.2kg/a

注4. 茎数は出穂した茎と未出穂の茎の合計

① 草丈・稈長

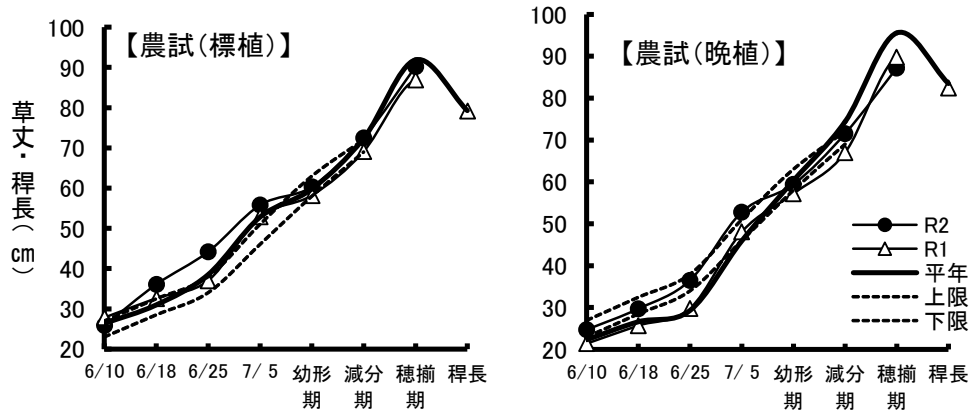


図-2 草丈の推移

(図中の2本の点線は理想生育の上限値と下限値を示す。)

② 茎数・穂数

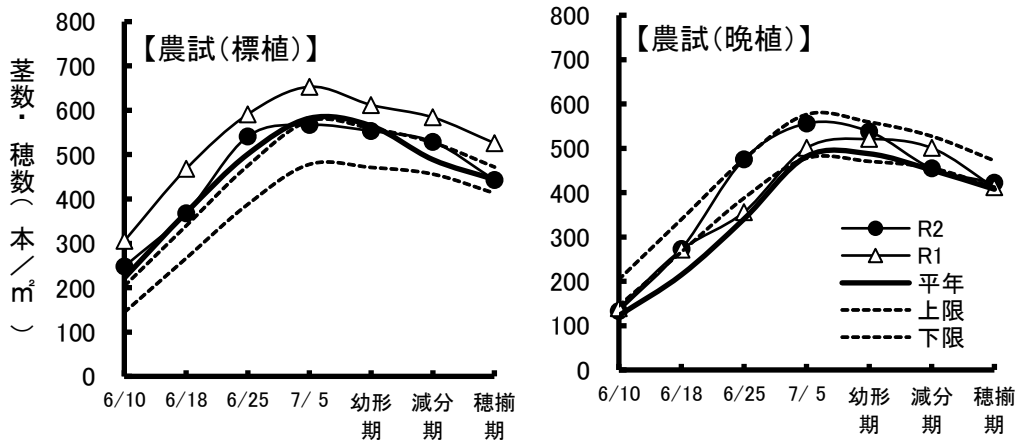


図-3 茎数・穂数の推移

(図中の2本の点線は理想生育の上限値と下限値を示す。)

③ 葉数

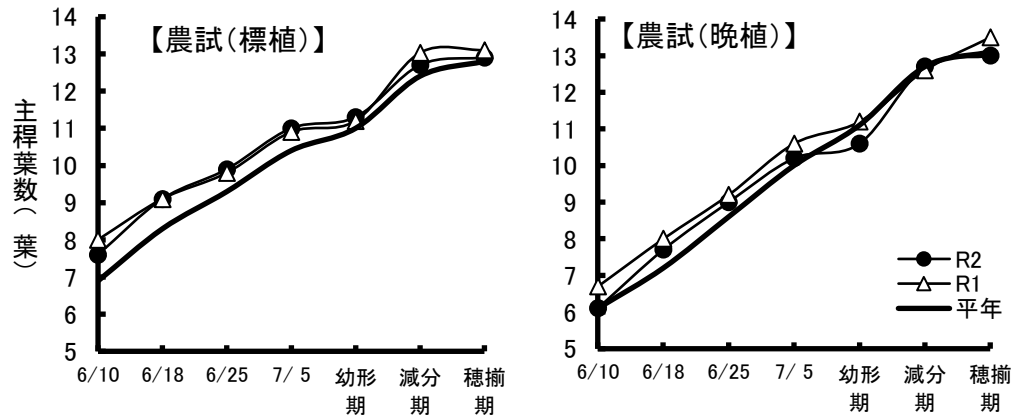
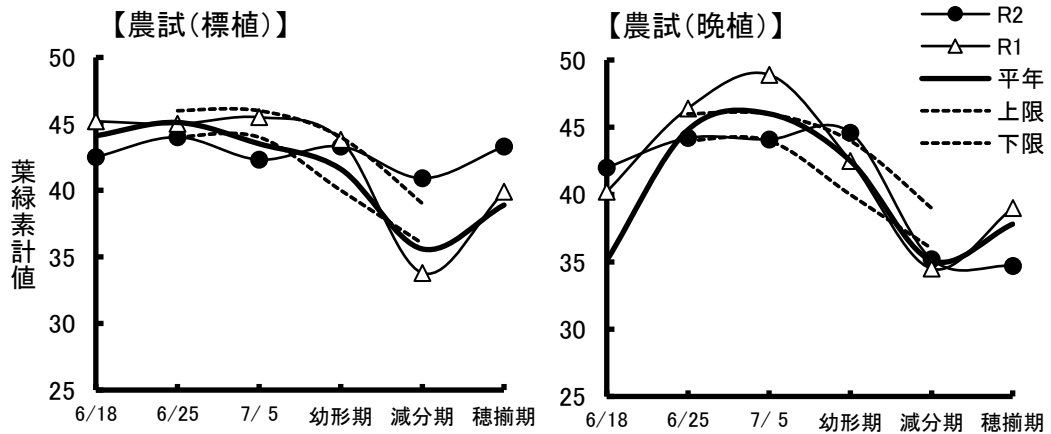


図-4 主稈葉数の推移

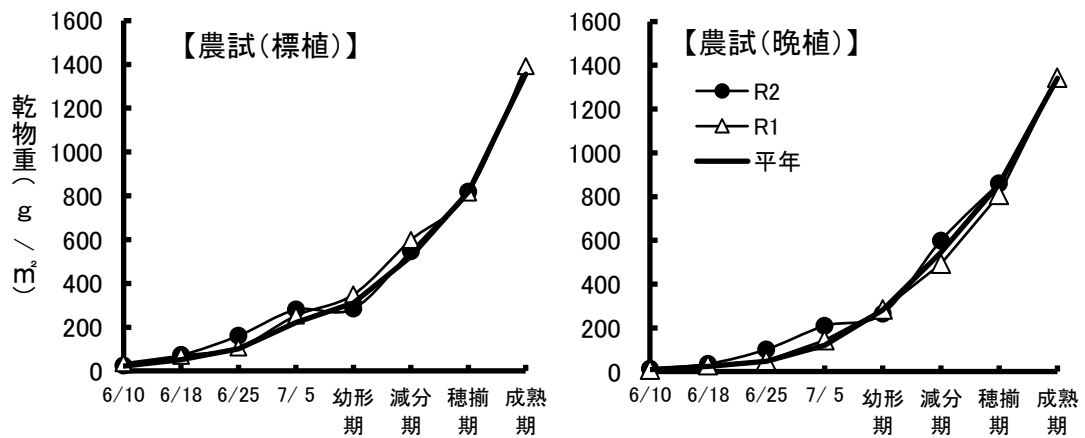
④ 葉色（葉緑素計値）



図－5 葉緑素計値の推移
 (図中の2本の点線は理想生育の上限値と下限値を示す。)

⑤ 乾物重

平年と比べて、農試（標植）は7月5日までやや多く、幼穂形成期がやや少ないが穂揃い期には平年並の819g/m²であった。平年と比較して、農試（晩植）は7月5日まではやや多く、幼穂形成期は並、減数分裂期はやや多く、穂揃い期はやや多く859g/m²であった。



図－6 乾物重の推移

⑥ 出葉期の平年比較

農試（標植）の出葉期は平年と比較して、5月下旬から7月上旬まで気温が高く、7葉期から13葉期までは3日または5日早く推移した。農試（晩植）は平年と比較して、7葉までは平年並、8葉～10葉は2～3日早く、11～13葉は平年並に推移した。

表－6 出葉期

品種	年次	出葉期								
		5葉	6葉	7葉	8葉	9葉	10葉	11葉	12葉	13葉
あきたこまち (標植)	R2	5/23	5/28	6/2	6/8	6/12	6/18	6/27	7/7	7/16
	R1	5/20	5/24	5/29	6/4	6/11	6/19	6/27	7/9	7/18
	平年	5/24	5/30	6/5	6/11	6/17	6/23	7/2	7/12	7/19
	平年差	-1	-2	-3	-3	-5	-5	-5	-5	-3
あきたこまち (晩植)	R2	6/1	6/5	6/10	6/15	6/20	6/26	7/5	7/15	7/23
	R1	5/29	6/3	6/7	6/13	6/20	6/24	7/1	7/10	7/19
	平年	5/30	6/5	6/11	6/17	6/23	6/29	7/6	7/14	7/22
	平年差	2	0	-1	-2	-3	-3	-1	1	1

注：標植の平年値は、平成12～令和元年までの平均。晩植の平年値は、平成29～令和元年までの平均。

移植時葉数の平年値は標植は3.4葉、晩植は3.5葉。

R2年の移植日と移植時葉数は標植5月15日、3.7葉、晩植5月25日、3.4葉

⑦生育ステージの平年比較

農試（標植）は、平年に比べ幼穂形成期、減数分裂期及び出穂期は平年よりやや早く、出穂期7月29日であった。

農試（晩植）は、幼穂形成期は平年に比べ早く、減数分裂期及び出穂期は平年並で、出穂期は8月4日であった。

表－7 生育ステージ

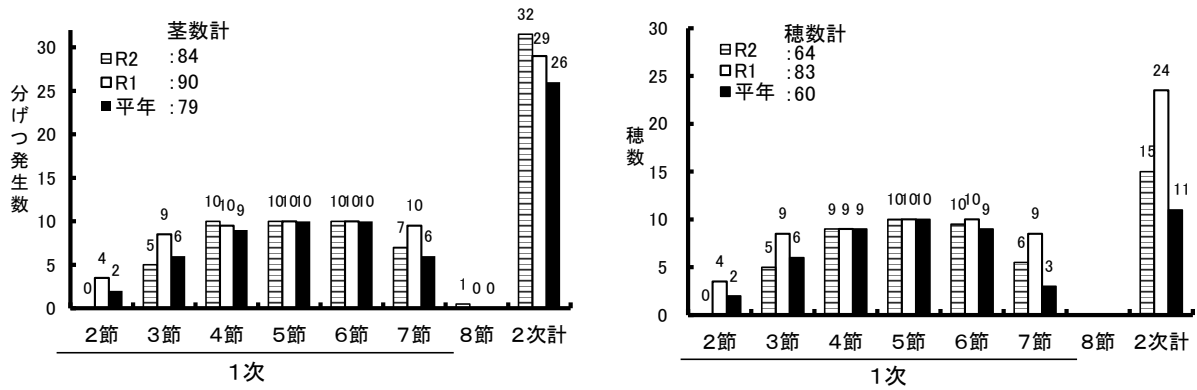
試験地	移植日	品種	幼穂形成期			減数分裂期			出穂期		
			本年	前年	平年	本年	前年	平年	本年	前年	平年
農試(標植)	5月15日	あきたこまち	7/7	7/9	7/9	7/21	7/21	7/23	7/29	7/29	7/31
農試(晩植)	5月24日	あきたこまち	7/12	7/14	7/15	7/28	7/25	7/28	8/4	8/1	8/3

注：中苗移植、平年値は標植：平成12～令和元年、晩植平成29～令和元年の平均。

⑧ 有効穂の発生次位・節位

<あきたこまち（標植）>

あきたこまち（標植）の分けつ発生は、平年と比べ、1次分けつは3～7節は並～少なかった。二次分けつは多かった。有効化した穂は、平年と比べ、3～6節は並で、7節は多かった。二次分けつはやや多かった。



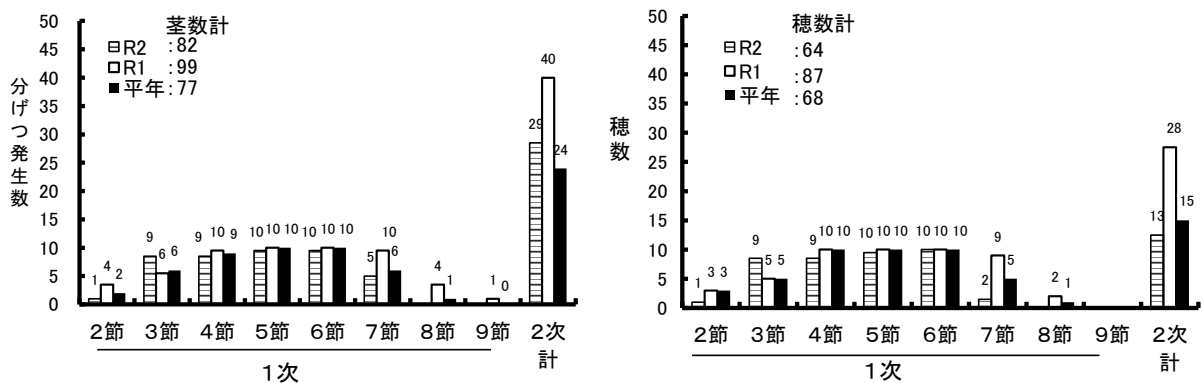
図一七 次位別の分けつ発生数（左）と穂数（右）（10個体あたり本数）

注: 平年は平成13年～令和元年の平均値。

ラウンドの関係で、総数と各節の合計は一致しない場合がある。

<あきたこまち（晩植）>

あきたこまち（晩植）の分けつ発生は、前年と比べ、1次分けつは2節は少なく、3～6節は並で、7節は多かった。2次分けつは少なかった。有効化した穂は1次分けつは2節、7節は少なく、3節は多く、4～6節は並であった。2次分けつは少なかった。



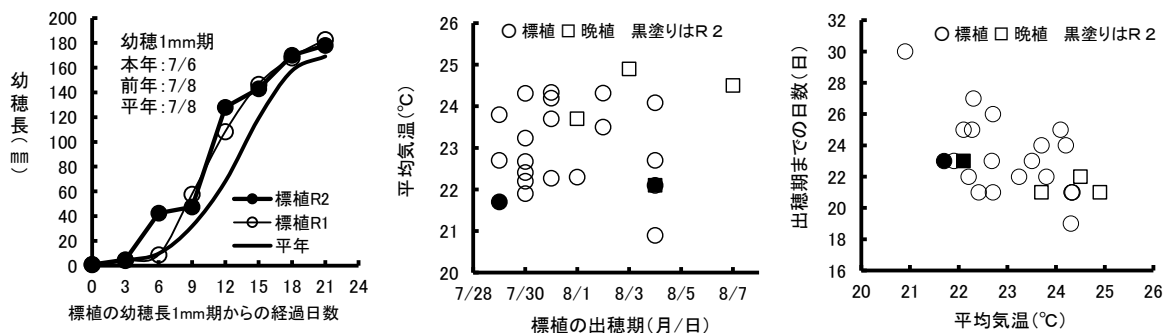
図一八 次位別の茎数（中苗 あきたこまち 10個体あたり本数）

注: 平年は平成29年～令和元年の平均値。

ラウンドの関係で、総数と各節の合計は一致しない場合がある。

⑨ 幼穂長と出穂期

本年の農試（標植）の幼穂1mm期は、平年より2日早い7月6日であった。幼穂の伸長は6日～9日目に停滞したが、以降は平年並に推移した。出穂期は7月29日、幼穂1mm期から出穂期までの平均気温は21.7℃（平年差-1.4℃）で、幼穂1mm期から出穂期までの日数は23日（同±0日）であった。



図－9 幼穂長と出穂期

注：平年は平成12年～令和元年の平均値

⑩ 出穂期10日後の籾殻の大きさと1穂籾数

出穂期10日後の籾殻の大きさは、農試（標植）では、籾殻長は7.13mm（平年比98%）、籾殻幅は3.40mm（同99%）で平年並であった。平年と比べて、1株平均穂数は22.0本（同105%）、1穂平均籾数は73.4（同108%）、1株当たり籾数は1,611粒（同113%）であった。本年は平年に比べ、穂数、1穂平均籾数は多く、1株当たり籾数は多かった。

農試（晩植）では、籾殻長は7.40mm（平年比98%）で、籾殻幅は3.38mm（同97%）で平年並であった。平年と比べて、1株平均穂数は20.9本（同106%）と多いが1穂平均籾数は67.0（同83%）と少なく、1株当たり籾数は1,399粒（同87%）と少なかった。本年は平年に比べ、穂数は多いが1穂平均籾数は少なく、1株当たり籾数は少なかった。

表－8 出穂期10日後の籾の大きさ、穂数、籾数調査

調査項目	標植				晩植			
	年次	R2	R1	平年 平年差 ・比(%)	R2	R1	平年 平年差 ・比(%)	
出穂期(月/日)	7/29	7/29	7/31	-2	8/4	8/1	8/3	-1
籾殻長(mm)	7.13	7.25	7.30	98	7.40	7.18	7.53	98
籾殻幅(mm)	3.40	3.50	3.43	99	3.38	3.37	3.48	97
1株平均穂数	22.0	25.3	21.0	104	20.9	20.3	19.8	106
1穂平均籾数	73.4	71.8	68.1	108	67.0	88.5	81.2	83
1株当たり籾数	1,611	1,817	1,427	113	1,399	1,797	1,608	87

注1: 中苗あきたこまち、標植5/15移植、晩植5/25移植、栽植密度20.8株/m²

注2: 窒素施用量: 基肥0.7kg/a、減数分裂期追肥: 0.2kg/a

注3: 標植の平年はH12～R1年の平均値、晩植の平年はH29～R1の平均値

⑪ 登熟の推移

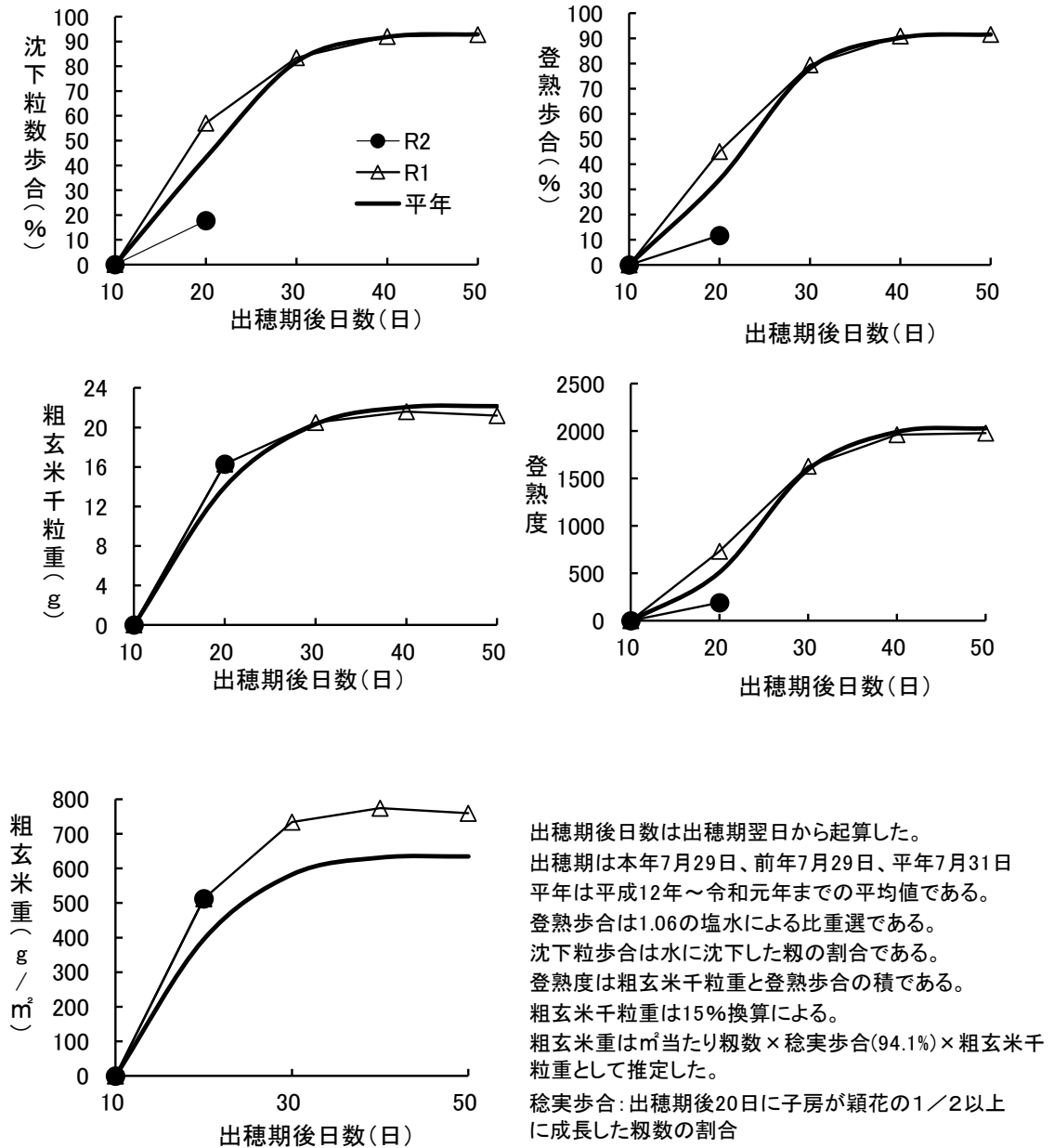


図-10 登熟の推移

出穂期20日後の沈下粒数歩合は17.7%、登熟歩合は11.7%、粗玄米千粒重は16.3g、登熟度は191であった。

粗玄米収量は、 $513\text{g}/\text{m}^2$ であった。

(2) 直播作況試験

1) 幼穂形成期・減数分裂期

幼穂形成期は7月20日で平年より1日遅かった。草丈は64.6cm（平年比103%）で平年より長く、茎数は503本/m²（同77%）と平年より少なかった。葉数は10.4葉（平年差-0.2葉）と平年より少なく、葉緑素計値は42.0（平年比104%）と平年より高かった。

減数分裂期は8月1日と平年より1日早かった。草丈は76.5cm（平年比99%）と平年並、茎数は445本/m²（同81%）と平年より少なかった。葉数は11.6葉（平年差-0.7葉）と平年より少なく、葉緑素計値は35.4（平年比102%）と平年並であった。

表-9 農試直播作況ほ場の生育概況（あきたこまち、湛水土中条播、5月11日播種）

生育ステージ	月/日	草 丈			m ² 当たり茎数			葉 数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年 比(%)	平年 比(%)	本年 (本)	前年 比(%)	平年 比(%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 比(%)	前年 比(%)	平年 比(%)
幼穂形成期	7/20	64.6	102	103	503	67	77	10.4	+0.2	-0.2	42.0	109	104
減数分裂期	8/1	76.5	96	99	445	78	81	11.6	-0.6	-0.7	35.4	112	102

注1) 平年値：過去10年間（H22～R1）の平均値

2) 出穂期・穂揃期

出穂期は8月10日、穂揃期は8月14日でいずれも平年並であった。

穂揃期の生育は、茎数は440本/m²（平年比91%）と少なく、1穂当たり着粒数は82.0粒（同125%）と多く、m²当たり籾数は36.1千粒（同117%）と多かった。葉数は12.3葉（平年差-0.5葉）と少なく、葉緑素計値は33.1（平年比102%）と平年並であった。

平年に比べm²当たり茎数は少ないが、1穂当たり着粒数がかかなり多いことから、m²当たり籾数は多くなった。また、平年より葉数は少なく、葉緑素計値は平年並であった。

表-10 農試直播作況ほ場の生育概況（あきたこまち、湛水土中条播、5月11日播種、穂揃期頃調査）

出穂期			穂揃期			m ² 当たり茎数			葉 数		
本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)
8/10	+2	±0	8/14	+1	±0	440	78	91	12.3	-0.1	-0.5
葉緑素計値			1穂着粒数			m ² 当たり籾数					
本年	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)			
33.1	108	102	82.0	158	125	36.1	123	117			

注1) 平年値：過去10年間（H22～R1）の平均値

注2) 葉緑素計値は止葉を測定した。

注3) 1穂着粒数及びm²当たり籾数は、サンプル調査による。

注4) 窒素施用量：基肥0.8kg/a（LP70：速効性=1：1）

3) 生育概況

本年は播種後10日間の平均気温は平年並であったが、播種後から断続的な降雨があり十分な落水管理にならなかったことと、5月20日～21日に低温に遭遇したことから出芽が緩慢で苗立数が少なかった。そのため、生育期間を通じて茎数は平年より少なく推移した。また、梅雨入り以降降雨日が多く、日照時間が平年より少なく経過したことから、葉緑素計値は7月中旬以降平年よりやや高く推移した（図-11、12）。

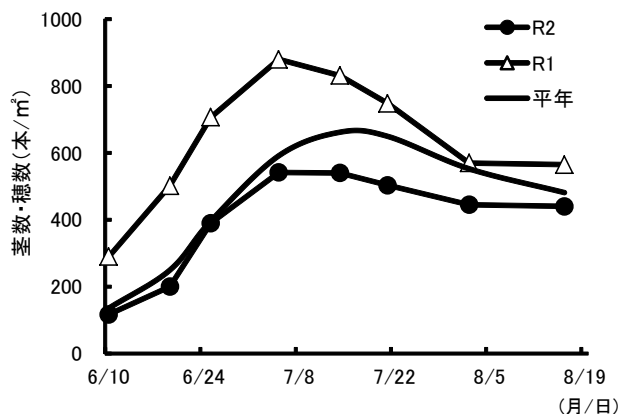


図-11 農試直播作況ほ場の茎数の推移

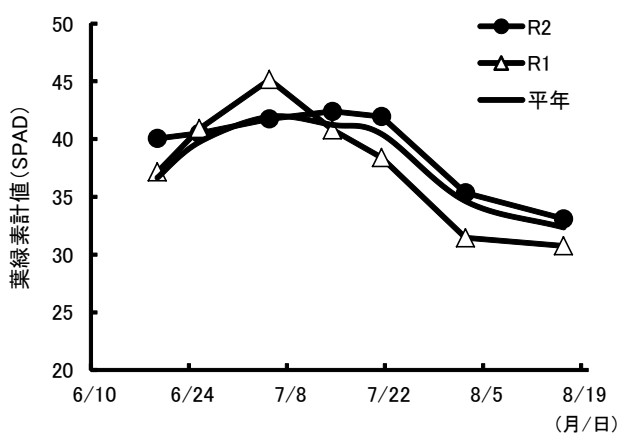


図-12 農試直播作況ほ場の葉緑素計値（SPAD値）の推移

(3) 出穂期の状況と出穂後の気象経過

1) 出穂の状況と気象経過(定点あきたこまち)

本年の各地域の定点あきたこまちの出穂期は、平年より2日早い～1日遅いでやや早い地域が多くなった。各地域代表アメダスデータから求めた出穂期後10日間の積算日照時間は平年比33～86%と地域差が大きく、かなり少ない地域が多い。積算気温は平年比101～105%で並～やや多い。8月18日以降気温が高く、日照時間が長い日が続いているため、出穂期後11日からの10日間では積算気温は全地域で平年よりやや多い～多く、積算日照時間は由利、平鹿、雄勝で平年より多く、鹿角は平年並、仙北はやや少なく、そのほかは少ない。

表－11 出穂期後10日間毎の積算日照時間、積算気温

地域	出穂期			出穂期翌日からの10日間						出穂期後11日からの10日間					
				積算日照時間(hr、%)			積算気温(°C、%)			積算日照時間(hr、%)			積算気温(°C、%)		
	本年	平年	平年差	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
鹿角	8/4	8/3	1	21	60	35	237	234	101	56	57	99	235	228	103
北秋田	7/31	8/1	-1	34	58	59	250	241	104	41	60	69	253	239	106
山本	8/2	8/2	0	22	65	33	257	246	105	44	66	66	250	243	103
秋田	7/31	8/1	-1	34	63	54	258	252	102	57	65	88	259	251	103
由利	8/2	8/3	-1	37	66	56	257	248	104	68	65	104	254	245	104
仙北	8/1	8/3	-2	43	63	68	256	247	104	58	61	95	252	243	104
平鹿	8/3	8/4	-1	42	61	69	263	251	105	68	59	116	258	246	105
雄勝	8/3	8/4	-1	52	61	86	254	244	104	65	59	111	247	238	104

注)出穂期は地域振興局定点調査ほの平均。

気象データは各地域代表アメダスデータ使用。

出穂期後11日からの10日間のデータ中の8月25日以降は、平年値を用いた。

2) 刈り取り適期の判定 (稲作指導指針p.77～78を参照)

各地域の定点あきたこまちの積算気温による刈り取り適期の目安は、鹿角9月17～23日、北秋田9月10～15日、山本9月11～15日、秋田9月8～12日、由利9月11～16日、仙北9月10～15日、平鹿9月11～16日、雄勝9月13～18日である。

8月18日以降、気温が高く日照が多い日が続いているため、今後刈取適期は早まると予想される。刈り取り適期は、積算日照時間も参考にして、最終的に各ほ場の籾の黄化程度90%で判断する。

表－12 積算気温及び日照時間による刈り取り時期の目安

地域	出穂期			積算気温の到達日		積算日照時間の到達日※	
	本年	平年	平年差	950°C	1050°C	200hr	265hr
	(月/日)	(月/日)	(日)	(月/日)	(月/日)	(月/日)	(月/日)
鹿角	8/4	8/3	1	9/17	9/23	9/20	10/5
北秋田	7/31	8/1	-1	9/10	9/15	9/16	9/29
山本	8/2	8/2	0	9/11	9/15	9/14	9/27
秋田	7/31	8/1	-1	9/8	9/12	9/7	9/19
由利	8/2	8/3	-1	9/11	9/16	9/6	9/19
仙北	8/1	8/3	-2	9/10	9/15	9/7	9/22
平鹿	8/3	8/4	-1	9/11	9/16	9/9	9/24
雄勝	8/3	8/4	-1	9/13	9/18	9/8	9/22

注) 出穂期は各地域振興局定点調査ほの平均。

気象データは各地域代表アメダスデータを使用し、8月25日以降は平年値を用いた。

※日照時間から判断したあきたこまち570kg/10a収量水準での刈り取り適期判断基準。

用語解説：「出穂期後の積算気温、積算日照時間」

- ・「出穂期後の積算気温、積算日照時間」とは出穂期の翌日から日々の平均気温、日照時間を積算したもの。
- ・出穂期とは穂揃期のことではなく、全茎数の40～50%が出穂した時期のこと。
- ・出穂とは止め葉の葉鞘から穂の先端(芒は含まない)が現れること。

各地域における技術情報等のお知らせ

各地域における技術情報等についての問い合わせは、最寄りの地域振興局農林部農業振興普及課に電話またはFAXでお願いします。

各地域振興局	電話番号	FAX番号
鹿角地域振興局農林部農業振興普及課	0186-23-3683	0186-23-7069
北秋田地域振興局農林部農業振興普及課	0186-62-1835	0186-63-0705
山本地域振興局農林部農業振興普及課	0185-52-1241	0185-54-8001
秋田地域振興局農林部農業振興普及課	018-860-3410	018-860-3363
由利地域振興局農林部農業振興普及課	0184-22-8354	0184-22-6974
仙北地域振興局農林部農業振興普及課	0187-63-6110	0187-63-6104
平鹿地域振興局農林部農業振興普及課	0182-32-1805	0182-33-2352
雄勝地域振興局農林部農業振興普及課	0183-73-5114	0183-72-6897

記事についてのお問い合わせは

秋田県農業試験場

TEL 018-881-3330

作物部

内線(422・423・424)

生産環境部

内線(305・306)

秋田県病虫害防除所

TEL 018-881-3660

秋田地方气象台

TEL 018-864-3955

東北農政局秋田県拠点 統計チーム

TEL 018-895-7303

秋田県農林水産部水田総合利用課 (農産・複合推進班)

TEL 018-860-1786

園芸振興課 (調整・普及班)

TEL 018-860-1801

【次回の発行日は12月21日(月)の予定です】